



ないとう きみよし/1931年生まれ。  
成人した一男一女の父親。聖書神学  
舎卒。センド宣教団協力牧師。長野県  
佐久市在住。

## Q クリスマスが 仏式の葬儀に出る意味は 何なのでしょう？

最近、未信者の親戚の通夜と告別式に出ました。なんとかお焼香はし  
ないですませましたが、気まずい雰囲気は残りました。お経はわけが  
分からず何とも言いようのない時間を過ごしました。  
これからもこういうことは必ずあるだろうと思うと、憂鬱です。飲食  
の時間も長く、お酒を飲まない私には、そこにいてだけで苦痛です。

## A 人間の「生」と「死」は、誰もが一度は経験する大事です

人間の「生」と「死」は、人生  
において誰もが一度は経験する大  
事です。無視して生きることなど  
できません。

ですから、クリスマンといえ  
ども、家族や親戚、友人、知人に  
対し、この事実に関係して生きる  
ことなど、できるものではないま  
せん。列席するかどうかは、それ  
まであなたが故人やそのご家族と  
どういう関わりがあったかを考え  
て決めるしかありません。

○遺族の慰めのために  
葬儀に列席することの意味、ま  
た目的は何でしょう。それは、宗  
教の違いや有無に関係なく、先  
逝かれた方をしのび、思い出を分  
かち、それによって喪主と遺族の  
方々が少しでも慰められることに  
あります。

できることなら、人生の尊さ  
や生かされている事実を思いを深  
め、生命の与え主であられる創造  
主を意識していただくために少し  
でもお役に立てば、列席者とし  
て意を尽くせたいと言わねばでし  
ょう。

しかしながら、実際に、仏式で

と行われる葬儀は、クリスマン  
には理解できず、また困惑させ  
られることが多いのも事実です。  
そのような儀式に長時間出席する  
のは、確かに大変なことだと思  
います。けれども、自分と故人との  
生前の交わりを回想し、自分には  
遺族や近親者を慰める役割がある  
と思われれば、どうぞその  
一点に心を定めて列席なさって  
ください。

○故人は神さまの御手にゆだねる  
ここで、葬儀についていくつか  
のことを理解しておかれることが  
必要かと思えます。

まず、先に地上の生涯を終えら  
れた故人に関しては、そのすべて  
は創造主なる神さまの御手にゆだ  
ねられているということです。残  
された私たちは誰一人、また何一  
つ、故人の霊(魂)の上に加える  
ことはできないし、差し引くこと  
もできないのです。どんな熱心な  
祈りも高価な供え物も、故人を変  
えるものではありません。

「階級特進」(古いことばです  
ね)や「死後褒章」も、よく考え  
てみれば、現実には故人にはな

く生存者に影響をもたらすものと  
言うべきであり、故人が神さ  
まの前にどうであるかという事実  
には、全く無関係です。

生存者である私たちの努力や儀  
式の方法で、故人の位が聖人にな  
ったりならなかったり、そんなこ  
とはもともとできるはずがありま  
せん。

葬儀そのものはいろいろな形で  
と行われますが、要は、主なる  
神が定められた厳かなみことばの  
示すところに従い、そこにあるご  
遺体を丁寧に敬重に取り扱い、  
送ることなのです。

もちろん、故人との交わりや親  
しみの深さと長さにおいて、哀惜  
の深さはそれぞれです。ですから、  
あくまでも機械的ではなく、心  
情的にまた信仰的に行われる  
のです。次のみことばが、それを  
明らかに示しています。

「ちりはもとあつた地に帰り、  
霊はこれを下さった神に帰る」(伝  
道者の書12章7節)

これらのことを心の中にしつか  
りと覚えておかれるなら、仏式と

いう名のもとに行われる儀式に対  
しても、自分なりに心を落ち着け  
て考えることができるでしょう。

また、遺族の方々に対してなまね  
ばならぬ自分の行動やことばなど  
も、考えることができるのではあ  
りませんか。

葬りの儀式は、永年の慣例や地  
域的な伝統もあるので、それぞれ  
対応も異なってくると思います。  
しかし一番大切なことは、その時  
その場で何をどうするかというこ  
とではなく、毎日の生活の中で自  
分がどう生きるかということなの  
です。やがては必ず、自分のまわ  
りの親や親戚、親しい友人の葬り  
の場に列席しなければならぬとい  
分かっていくのなら、日々、自分  
のできる限りの真実と愛をもって  
接していくことこそ大切です。

○できないことは静かに辞退する  
私のことを例にとってみましょ  
うか。

私はただいま76歳になります。  
近親者や親戚の葬儀は毎年少なく  
なり、むしろ友人を見送るほうが  
多くなっています。これは、年々

増える一方です。

けれども、昔から高齢者に対し  
てこう言われています。  
「転ぶな。風邪引くな。義理を  
すなわち、冠婚葬祭に出向くこ  
とは少なくてよい、ということだ  
す。これは必ずしも年齢によらず、  
時代や世相もこのような傾向にあ  
るように感じられます。だから私  
は、実際に列席する機会を意識的  
に少なくしております。

それでも、私なりに哀悼や哀惜  
の思いを表すことができます。心  
を込めてご遺族に手紙を書けま  
す。また、具体的に「志」をお送  
りすることもできます。金銭の場  
合、クリスマンは「お花料」と  
か「祈」「慰安」と書きましますね。

もちろん、明らかに列席すべき  
場合は、たとえキリスト教式でな  
くても参ります。信仰的に同じ行  
動をとれないこともあります。が、  
その時は静かに辞退いたします。  
親しい食事の席に招かれれば、そ  
こにも参ります。

その時は、できるだけ話題に心  
配りすることは言うまでもありま

せん。どちらかと言えば、聞き役  
にまわります。脇役のようであっ  
ても、故人との関係の中で、でき  
る限り徳が建てられるような思い  
出話に加われるよう、話題を選ん  
で過ごします。そうすると、いろ  
いろな人の話を通して、何事かを  
感じたり教えられたりすることが  
あるように思います。

昔は、お酒を勧められると、お  
断りするのには大変困惑したもので  
す。しかし今は、車を運転したり  
同乗したりする機会が多いので、  
静かに、また容易に理解してもら  
えるでしょう。

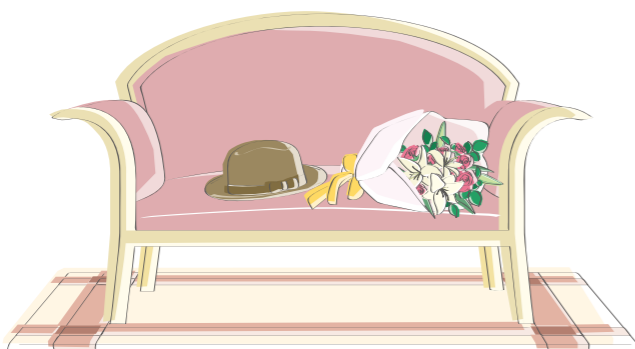
### ○少々の知識を

最後にお勧めしたいのは、仏教  
の基本的な教理や概要、また葬儀  
との関わりについて、少し知識を  
得ておくことです。実は、現代日  
本の仏教的と思われる葬りの儀式  
のほとんどは、教理的には無関係  
で、誤っていることも多いのです。  
それを知った時、私は自分の心  
の中に、ある落ち着きと静かな責  
任感のような確信がわいてまいり  
ました。クリスマンではない方  
の、次の著書をお薦めいたします。

一読されたらいかがでしょうか。

●渡辺照宏「日本の仏教」(岩波  
新書299号)

●村井幸三「お坊さんが困る仏教  
の話」(新潮新書2008号)



### 質問募集

編集部では、皆さまから  
のご意見やご感想をお待ち  
しています。

また、皆さまからの内藤  
師への、家庭生活に関する  
ご質問やご相談をお寄せ  
ください。

採用された方には、記念  
品をお送りいたします。

home.office@ffj.gr.jp  
TEL&FAX045-933-3875